

Title	古代英語謎詩七十四
Sub Title	Old English riddle 74
Author	小田, 卓爾(Oda, Takuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.39, (1980. 2) ,p.272(15)- 286(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00390001-0286

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

古代英語謎詩七十四

小田卓爾

(1)

ジャーボンの司教 (Bishop of Sherborne) マームスベリのアルドヘルム (Aldhelm of Malmesbury, 639—709) は、その『謎詩百編 (*Aenigmata Aldhelmi*)』の序文において、離合体の詩文⁽¹⁾ (acrostic) で次のように述べている：

我は、詩歌をものするにあたりて、カスタリアの女精どもに助力を請わず、蜜蜂らが我の唇に甘き神酒を注ぐことも許さず。我は、シンスの峰をさまよわず、太古のパルナソスの斜面に横臥せしことも、奇異なる夢を見しこともなし。神こそ我に詩作の力を満たし、我の鈍き心に清き詩才を吹き込まれるゆえ。

このように、百編の謎詩を詩作したアルドヘルムの本意は、神の栄光をたたえることであつた。当時の他の謎詩集と同じように、動植物・自然・日用品などを主たる題材としてはいたが、すべての創造物は神の力と驚異を物語るものである、と彼は考えていた。それゆえ、96行にも及ぶ高潔な宗教的作品「自然 (*Creatura*)」で『謎詩百編』を結んだのである。

しかし、この序文から、アルドヘルムがギリシャ・ローマの古典と神話の世界を頑に排除していたと考えるのは誤りである。彼の古典古代に対する関心は並のものではなかつた。彼は、670年にアフリカから渡英した学者ハドリアヌス (Hadrianus) のもとで古典を学び、ラテン詩の韻律法やギリシャ語の訓練を受けていたのである。『アルドフリス王にあてた韻律に関する書簡 (*Epistola ad Acircium de Metris*)』はもとより、謎詩集の随所に描かれた古典的背景や六歩格の形式 (hexameter) は、その経緯を如

実に物語っている。例えば、第七番目の謎詩「運命 (Fatum)」では、キリスト教を賛美することを主眼としながら、同時に、異教の詩人を愛し、神話を楽しむ気持ちをあからさまに述べている。冒頭に引いた序文における異教世界への言及は、アルドヘルムの古典と神話に対する造詣の深さを示すものとも解釈できるのである。

卑近な事物が謎詩の題材として多く用いられるのは、出題者と解答者に共通した話題を題材としなければ、謎解きの興味が著しく減少するからである。ラテン語や古代英語のものを問わず、当時の謎詩に古典的背景がしばしば描かれたことは、それが多くの教養ある人々の間に共通の知識としてあったことを意味している。古典と神話への深い造詣は、アルドヘルム特有のものではなかったのである。以下に論じる『古代英語謎詩74番 (Old English Riddle 74)⁽²⁾』も、こうした背景を視野に入れて考察しなければならない。

(2)

『古代英語謎詩 (以下 *Rid.* と略す) 74番』は、次のような long-line にして五行の作品である：

Ic wæs fæmne geong, feaxhar cwene,
ond ænlic rinc on ane tid :
fleah mid fuglum ond on flode swom,
deaf under ype dead mid fiscum,
ond on foldan stop : hæfde ferð cwicu.

(訳) かつて私は若き乙女、
灰色の髪の女、
たくましき若者。
鳥とともに空を飛び、
海を泳いだ。
波浪の下に潜り、

魚とともに死んで
地上を歩いた。
私は生ける命を持っていた。

この作品は古代英語謎詩の中で最も難解なものの一つであり、依然として決定的な解答が出されていない。これまでの解答の主たるもの十例を、
提唱者とともに列挙してみると次の通りである：⁽³⁾

- (1) The Sun (Müller)
- (2) Hyena (Loewenthal)
- (3) Swan (Holthausen)
- (4) Writing (Whitman)
- (5) Cuttlefish (Dietrich, Walz)
- (6) Siren (Tupper, Krapp and Dobbie)
- (7) Ship's Figurehead (Williamson)
- (8) Water (Trautmann, Wyatt)
- (9) Rain (Baum)
- (10) Soul (Erhardt-Siebold)

(1) (2) (3) (4) は、今日では正解とされていない。

(5) の「たこ (Cuttlefish)」は、(6) の「サイレン (Siren)」とともに、ラテン語の謎詩にやや類似したものがあるために得られた解答である。最初に Dietrich が、アルドヘルムの「飛魚 (Luligo)」の中の詩行と比較して、この解答を導いた。しかし、やがて証拠不足のためにそれを撤回した。その後 Walz が、プリニウス (Plinius) の「たこは、しばしば水より出ず⁽⁴⁾」という記述から類推して、Dietrich の結論を正解としている。しかし、冒頭の二行に描かれた三つの容姿―「若き乙女」「灰色の髪の人」「たくましき若者」―から、今日の「たこ」の姿を想像することは、まさに至難の技である (!)

(6) の「サイレン (Siren)」は Tupper の解答である。彼は、17世紀

初頭の Nicolas Reusner のラテン語謎詩集に収められた二編の「サイレン」(一編は Reusner 自身のもの)が、*Rid.* 74 にわずかながら類似している点に着目した。さらに、ギリシャ、ローマ、エトルリアの半人半鳥 ('bird-woman' or 'bird-maid'), ゲルマン人の人魚 ('fish-woman' or 'mermaid'), Philippe de Thaun の言う腰までは女の姿、魚の尾を持ち、鷹の足をしたサイレンの例を挙げている。しかし、彼の解答の最大の矛盾は、これらの動物(?)の一部の属性のみを切り取り、*Rid.* 74 に見合うように継ぎ合わせて「彼の」サイレンを作り上げている点にある。少なくとも、アングロ・サクソン人たちが彼が言うようなサイレンを知らなかったことは事実である。彼が列挙した上記の動物(?)が「同時に (on anetid)」冒頭二行の三つの姿をとることは不可能であるし、それらが変身したかどうかは確言できないのである。確かに、アングロ・サクソン人たちは 'mereman' や 'merewif' という語を知っていた。しかし、'mereman' は語彙が記録されているだけであり、'merewif' は *Beowulf* (l. 1519) の Grendel の母に使用されているが、Grendel の母は「若き乙女」ではなく、「たくましき若者」でもない。また、Tupper は、「波浪の下に潜り、魚とともに死んで」の部分の説明するために、アルゴ船 (The Argonauts) がシシリー島 (Sicily) のペロールム岬 (Pelorum) を通過するとき、オルフェウス (Orpheus) の歌に破れて海中の岩になったサイレンを引き合いに出している。しかし、仮にサイレンが岩と化したために魚とともに死んだと考えることはできたにしても、そのサイレンが蘇生し変身して地上を歩きはしなかった。結局、Tupper の見解は、17世紀初頭の謎詩集に議論の起点を置いた時点で、すでに多くの矛盾をはらんでいたのである。

(7) 「船首像 (Ship's Figurehead)」は、最近の校訂本の校訂者 Williamson が試みた解答である。彼は、Tupper と同じように考古学的考察を重視し、すでに1973年に Ph. D. 論文でこの解答を提案していた。しかし、最も新しい解答であり、いまだに公の批判を受けていない。*Rid.* 74 を注意深く読んでみると、この解答にも多くの矛盾点が見出される。まず、Williamson によれば、この作品は女性の船首像を描いたものであるとい

う。当時、種々の造形の船首像があったにもかかわらず、なぜ作者は女性の船首像だけをあえて歌ったのであろうか。この船首像を、Williamson は 'diving at times through the waves or salt spray with the fishes' と説明している。たまたま *Rid.* 51 (l. 5) にも、'deaf under ype' が用いられている。これは、ヘンがインクの中に「潜る」有様を表現したものである。このことを考えると、'deaf under ype' が水しぶきを浴びて進む船首像を表現するのに適切な語句とは思われない。また、Williamson も述べているように、船首像はすぐ替えることができ、船が碇泊するときなどには外しておく。外された船首像が地上を「歩いた (stop)」というのも奇異である。むしろ、それは地上で「立った (stod)」と言うべきであり、現に Williamson 自身も、外された船首像を説明して、'It would stand on the land' と述べている。彼の 'mid fiscum' の解釈も正鵠を得ていない。確かに、船首像は木を彫って製造したものであり、「死んだ (dead)」とも言えそうである。しかし、やはり Williamson 自身が言うように、船首像は「波の上を空を切って飛ぶ ('fly through the air above the wave')」ものであり、魚のいる水中に潜っているものではない。作品全体を通して、Williamson は語句を過度に隠喩的・迂回的に解釈しているように思われる。このように解釈した場合、語句がいかなる対象を表現しているかを突き止めることは、非常に困難である。

(8) の「水 (Water)」は、恐らく、以上の解答例の中で最も矛盾点が少ないものであろう。(9) の「雨 (Rain)」という解答は、「水」と同じ考えに基づいている。自然界において様々に変容する「雨」すなわち「水」を描いている、と解釈するのである。しかし、この二つの解答にも、いくつかの疑問点が見出される。Trautmann によれば、冒頭二行の「若き乙女」「灰色の髪の子」「たくましき若者」は、それぞれ水が変容した三つの姿、すなわち「泉」「氷柱」「雪」を表わすという。当時、このような隠喩的表現がどの程度まで慣用的であったか確かではなく、それらが解答を類推させるに適した譬え方であるとも思われない。この解答では、雲（または、*Rids.* 1—3 のように風）が雨となって海に落ちることが「鳥

とともに空を飛び」以下で叙述されていると考える。しかし、水である雨が同じ水である海に落ちて姿をなくすことから、仮に「死んで (dead)」と言えたにしても、同じ水である「海 (flod)」を泳いだり、「波浪(yf)」の下に潜るのは奇異なことである。水である「海」や「波浪」の中に入る「私 (Ic)」は、水以外のものであるべきである。また、末尾二行から、「私」は「死して生けるもの」でなければならない。ところが、水が海の中で死んで、他では生きていたというのも奇妙である。しかし、この二つの解答から、「私」は変容する何物かであることが想像される。

(10) の「魂 (Soul)」は、著名な謎詩研究家 Erika von Erhardt-Siebold が提案した解答である。彼女は、*Rid. 74* の詩行とエムペドクレス (Empedokles) の宗教論『カタルモイ (*Katharmoi*)』断片 (B 117)⁽⁵⁾ とが酷似していることに注目し、*Rid. 74* における変容する「私」の正体を「魂」と解答した。この解答は、エムペドクレスとアングロ・サクソン人との間に時間的・空間的な距離が余りにも開き過ぎているため、これまでさほど重視されてはいなかった。しかし、「魂」と解答することによって、従来の諸解答の疑問点がすべて解消されると言っても過言ではない。拙論の目的は、Erhardt-Siebold の解釈の趣旨を弁護する立場から、まず、エムペドクレスの宗教論・宇宙論と *Rid. 74* とを照合することによって、もっぱら両者の思想の共通性を確認し、次に、*Rid. 74* の「私」の正体を明らかにしながら、エムペドクレスとアングロ・サクソン人との隔たりを埋めることである。

(3)

余はかつて若き男の子にも成り、茂みにも鳥にも、さてはまた渡津
海の物言わぬ魚となりしことあり⁽⁶⁾。

この引用文は、エムペドクレスの宗教論『カタルモイ』断片 (B 117) である。ここでは、エムペドクレスが罪を犯したダイモン (daimon) すなわち「神霊」となって天上の世界から転落し、地上の世界で可死者となって

悲惨な輪廻転生の苦痛を体験する有様が述べられている。エムベドクレスの言葉を借りて、さらに補足すれば、転落したダイモンは「三万季節のその間、至福の群より離れつつ漂泊するぞ運命なる。時をへだてて生れては死すべきもののありとある姿形に身を変じ、苦しくつらき生命の道をば変えつつたどるなり」⁽⁷⁾という転生の憂きめにあうのである。こうした漂泊のあと、ダイモンは再び天上の世界へ帰って行く。断片 (B 117) では、エムベドクレスたるダイモンが、自ら地上で変身した可死者の姿を、若者、乙女、茂み、鳥、魚、というように具体的に列挙しているのである。

Rid. 74 においても、「私」は、乙女、⁽⁸⁾老女、若者、鳥、魚、になったことが語られている。断片 (B 117) と *Rid. 74* を比較してみると、偶然ときめつけるには両者は余りにも類似しすぎている。そこで、もし *Rid. 74* が何らかの影響をエムベドクレスから受けているとすれば、この作品の表現法は、隠喩的なものではなく、直接的に叙述したものと看做さなければならない。「船首像」の場合のような隠喩的・迂回的解釈が意味をなさなくなることはもとより、「水」の場合のように、冒頭の二行を「泉」「氷柱」「雪」に譬えることも無理である。また、‘on ane tid’ を、「サイレン」や「船首像」の場合のように、「同時に (at once)」と解すべきではなく、過去の事実を叙述するための「かつて (once)」の意味に解すべきである。

(4)

ところで、天上の世界から転落したあとダイモンが悲惨な漂泊のうちに辿るところ、いわば、その舞台装置ともいべきものであるが、それらには、エムベドクレスの宇宙論『ペリ・ピュセオス (*Peri Physeos*)』でいう四つの「根 (rhizomata)」—空気、水、土、火—を代表する大気、海原、大地、太陽が選ばれている。断片 (B 115) には、次のようなことが述べられている：

力も強き大気は海原へとダイモンを追いやるも、海原はまた地表へとそのダイモンを吐きだし、かつまた大地もダイモンをきらめき輝

く日輪の光の中へ投げこめば、その日輪はさらにまた大気の渦のその
中へ投げ込み入れる次第なり。⁽⁹⁾

エムペドクレスは転落したダイモンとなって、動植物に変身しながら、大気、海原、大地、太陽の光の中をさまようのである。可死者となって漂泊するため、太陽の燃える火の中は通らない。燃えてしまうからである。太陽を除いた陸・海・空を可死者となって転生する魂については、ピタゴラス (Pythagoras) も論じている。ピタゴラスの哲学によれば、人間の魂は不滅であり、肉体が減じたあと、陸・海・空の動物の身体に入ってゆく。その経緯を、ヘロドトス (Herodotus) は次のように説明している：

人間の魂は不死であって、肉体が減じた時には、その時々を生れてくる他の動物のうちに入っていく、そして陸の動物、海の動物、空飛ぶ動物の凡てを経めぐると、再び生れてくる人間の身体のうちへ入っていくが、この魂の循環は三千年を要する……⁽¹⁰⁾

エムペドクレスの哲学の系譜を溯行すればピタゴラス派の哲学に辿りつくことは、広く知られている。⁽¹¹⁾ピタゴラスが述べる陸・海・空の魂の経路は、エムペドクレスのダイモンの「苦しくつらき生命の道」でもある。

以上のことは、*Rid.* 74 の「鳥とともに空を飛び (fleah mid fuglum)」以下の叙述と完全に一致する。「私」は、鳥になって空を飛び、魚となって海を泳ぎ、動物となって陸を歩むのである。この魚は一般の魚ではなく、「いるか (dolphin)」であったかも知れない。「いるか」のギリシャ語 *delphinus* が、語源的にデルポイ (Delphoi) と関係があることは想像に難くない。そこで、もし *Rid.* 74 とエムペドクレスとの間に何らかの関係があるとすれば、「鳥とともに空を飛び」から「地上を歩いた (on foldan stop)」までの部分は、「船首像」の場合のように、同一物を様々に隠喩的に表現したものではなく、「私」の変容を順次それぞれの背景とともに描写したもの、と解釈しなければならない。‘foldan’ を対格 (accusative) と

考え、「地中へ」として方向性を読みとり、『カタルモイ』の完全憎と対応させることも不可能でない。変容する主体の「私」は、同質の物質に吸収されて姿を消す「水」ではなく、姿を整えた生物体であるべきであり、ましてや、半人半鳥の精や人魚の属性をもち、無生物の岩になっては蘇生するという Tupper の創造になる「サイレン」ではあり得ない。

(5)

それでは、この可死的なる生物体とはいかなるものであろうか。『ペリ・ピュセオス』の宇宙論は、構成要素である空気、水、土、火という四つの根と、さらに、これらの四根を結合させる力をもつ愛 (Philotes) と分離させる力をもつ憎 (Neikos) から構成されている。愛の力が完全に支配するときには、四根は完全に混合して「一」の状態となるが、憎の力が完全に支配するときには、四根はそれぞれ完全に分裂して「多」の状態となる。しかし、愛の力が伸びる時期と憎の力が伸びる時期には、愛と憎の両方の力が働くので、四根は混合したり分裂したりして、可死的なるもの、すなわち、死滅しなければならぬ生物体が現出するのである。しかし、死滅とは四根が分離することであり、誕生とは四根が混合することである。可死者たる生物体が一個の生物体として死滅しても、分離した四根の新たな混合によって別の可死者たる生物体が生成されるのである。この経緯を、断片 (B 21) は次のように述べている：

これらのもの (四根) は凡て怒の御代にありては、形を異にし、離れているが、愛の御代にありては、一緒になり、互に相求める。何故なら、これらのものから、かつて有りしものも、現に有るものも、後に有るだろうものも、すなわち木々も、男女も、獣どもも、鳥どもも、水に養われる魚どもも、命長く位いと高き神々も、出できたるゆえ。何故なら、ただこれらのもの〔要素 (四根)〕のみあって、互に駆けぬけつつ、いろいろな姿のものになるゆえ。〔これらのものの〕混合はかくも甚しき変化をもたらす。⁽¹²⁾

人間の俗的な言葉では生物体の誕生と死と言えるにしても、生物体を構成する構成要素には、生成も消滅もあり得ないのである。この断片 (B 21) と、次に引用する断片 (B 8) とを併せて考えれば、このことは明らかになるであろう：

死すべきものすべてには誕生もなく、破滅的死の終わりもなく、ただ単に混ぜらるるものの混合とその分離のあるのみなり。誕生とは人々によりてそれなることに与えられし名前なるのみ。⁽¹³⁾

このように『ペリ・ピュセオス』において論じられた可死的なる生物体が現出する時期、すなわち、愛の力が伸びる時期と憎の力が伸びる時期は、『カタルモイ』におけるダイモン漂泊の循環のどの部分に相当するか、この点は明らかであろう。ダイモンが可死者となって地上の世界を輪廻転生する時期に、確実に重なり合うのである。エムペドクレスの宇宙論と宗教論が緻密に対応しているとすれば、輪廻転生の主体は四根であると言っても過言ではない。ダイモンは、四根の混合分離の繰り返して現出する様々な可死者、具体的に言えば、断片 (B 117) が示すような、若者、乙女、茂み、鳥、魚などに姿を変えつつ、この世を転生していたのである。一個の可死者として死しても、また別の可死者として生れ変わる。すなわち、ダイモンは不死者である。エムペドクレスが大きな影響を受けたと言われているヘラクレイトス (Heraclitus) は、独特の謎的文体で「不死なる可死者、可死なる不死者、彼らはかたみに死を生き、その生を死す」と逆説的に生死の問題を論じている。これは、エムペドクレスのダイモンが体験する輪廻転生と根本的に考え方が一致する。⁽¹⁴⁾

Rid. 74 に眼を転じ、とくに「魚とともに死んで (dead mid fiscum)」以下に注目すると、この生と死を扱った部分も、上述のヘラクレイトスとエムペドクレスの逆説に完全に符合していることが分かる。そこで、再び *Rid. 74* とエムペドクレスの間に何らかの関係があるとすれば、*Rid. 74* の行為の主体「私」を、エムペドクレスのダイモンに置き換えて考えることができるであろう。事実、「私」は、乙女、老女、若者、鳥と変身した

あと、魚となって死ぬ。しかし、それによって「私」は死滅してしまったのではなく、再び「生ける命 (ferð cwicu)」をもって、地上へと向かったのである。「魚とともに死んで」以下、とくに末尾の一行については、これまで十分な解釈がなされなかった。「船肖像」の場合、‘ferð cwicu’には‘living spirit」といったやや強引な擬人化した意味を与えている。恐らく、「水」や「雨」の場合にも、‘living soul’ という意味で擬人化して考えていると思われる。「サイレン」と解答した Tupper は、末尾の二行を ‘I dove under water, dead with the fishes; and (when) I stepped on the ground, I had a living soul’ という現代英語に訳している。しかし、これでは何ら面白味のない文章になってしまう。四行と五行の対照法 (antithesis) を読みとっただけである。Erhardt-Siebold も ‘ferð’ を ‘soul’ と考えて、一時、*Rid.* 74 は謎詩ではないという結論を出した。しかし、エムペドクレスの言う生誕と死の終末の意味を考えると、この ‘ferð’ は「生命 (life)」と解すべきである。「生ける生命」は、いわば冗語 (redundancy) であるが、エムペドクレスやヘラクレイトスの「不死なる可死者、可死なる不死者」といった逆説的生死観が念頭にあれば ‘cwicu’ は、単に ‘dead’ と対をなす修辞法上の効果をもつだけでなく、同時に、重要な意味をも表現していることが分かるはずである。

(6)

それでは、*Rid.* 74 の「私」は「ダイモン」である、と解答すべきであろうか。この点に関しては、多少、慎重になる必要がある。紀元前五世紀のシシリー島アクラガス (Akragas) のエムペドクレスと *Rid.* 74 との間にある、時間と空間の隔たりを十分に考慮しなければならないからである。しかし、Erhardt-Siebold の解答「魂」を否定的に評して、Baum が「アングロ・サクソン人がいかにしてエムペドクレスを知るようになったか明確でない」と述べているのは性急である。確かに、エムペドクレスと *Rid.* 74 の系譜を濃い直線で結ぶことは容易なことではないにしても、両者を関連づける確かな媒体が多分にあったからである。Erhardt-Siebold は、

当時のブリテン島には、三種の影響によって魂の輪廻転生の思想が流布していた、と述べている。すなわち、古典の文物、初期キリスト教の教父の著作、そして、土着の原始的信仰である。前二者については、当時の多くの著名な学僧を思えば、十分に推測できることである。例えば、謎詩も創作したと言われる北方のビード (Bede) は、早くから古典と教会の文物に接する機会をもっていた。ベネディクト・ビスコプ (Benedict Biscop) が、七世紀に、ウェアマス (Wearmouth) とジャーロウ (Jarrow) に相次いでローマ方式の教会を建立し、ローマはもとより各地から多数の文物を収集して、当時の学問の中心地としていたのである。ビードは、生涯のほとんどをそのジャーロウで過ごした。南方のアルドヘルムの学殖については、すでに述べた通りである。こうした学者が、オルフィズム的・ピタゴラス的 (orphico-pythagorean) 哲学、すなわち、魂の輪廻転生について、ある程度の知識をもっていたことは想像に難くない。土地に根ざした人々の原始的信仰の場合はどうであろうか。

シーザー (Caesar) は、『ガリア戦記 (*Commentarii de Bello Gallico*)』において、「(ドルイド教の) 僧侶はまず靈魂が不滅で死後はこれからあれへに移ることを教えようとする⁽¹⁵⁾」と述べている。僧侶たちは、ドルイド教の教え以外の事柄にはギリシャ文字を用いていた。「ドルイド (druid)」という語も、語源的にはギリシャ語の 'drus (樫の木)' に由来する。ディオドロス・シクルス⁽¹⁶⁾ (Diodorus Siculus) やティマゲネス⁽¹⁷⁾ (Timagenes) は、ケルト人の靈魂不滅の信仰はピタゴラス派の哲学から得たものである、と述べている。一方、ルカヌス⁽¹⁸⁾ (Lucanus) は、ケルト人とローマ人の信仰が根本的に異なることを指摘している。もっとも、これらの古代の著述家たちは、輪廻転生の基本原理については詳細に論じていない。ケルト人の信仰とピタゴラス派の哲学を関連づける考古学的資料も発掘されてはいる⁽¹⁹⁾が、これをもって両者の関係を強調することも慎しむべきであろう。しかし、靈魂不滅・輪廻転生の信仰は各地に遍在したものであり、ローマ人とケルト人の交流がきわめて頻繁であった以上、この信仰がドルイド教とともに強く土地に根ざしていた当時のブリテン島に何らかの形でオルフィズ

ム的・ピタゴラス派的哲学の輪廻転生の思想が移入されたとき、それを受け入れる確実な素地があったことは間違いない。Corcoran は、ケルト人は彼らの宗教体験の枠組に対応するものを絶えず求めていた、と述べている。⁽²⁰⁾ それらが、彼らにとって、まず古典古代の世界であったことは言うまでもない。

(7)

Rid. 74 とエムペドクレスの間に確実な関連性を認めることが可能ならば、この謎詩の解答を「ダイモン」とすることもできるのであろう。それでは、ダイモンとはいかなるものなのであろうか。

一般的に言えば、ダイモンとは、個人とは別にある個人の生涯を守護する一種の不滅の霊、または「魂」である。それは、個人の誕生と同時に個人に付着し、個人が個体として死滅してもあとに残る「神霊」である。すでに述べたように、エムペドクレスは、このダイモンを真の自己と看做していた。すなわち、「エムペドクレス」自身がダイモンになっていたのである。しかし、エムペドクレスたるダイモンは、罪を犯して地上の世界に転落し、悲惨な輪廻転生の苦しみを体験するのである。また、もしエムペドクレスの宇宙論と宗教論が対応するなら、輪廻転生の主体は、魂であると同時に魂を構成する「四根」であるとも言える。このように考えた場合、「ダイモン」「魂」「神霊」「エムペドクレス（人間）」「四根（四元素）」を同一視しなければならないであろう。*Rid. 74* の解答は、これらの中に潜んでいると思われる。

エムペドクレスの輪廻転生の哲学には、その根底に、死滅する肉体と不灭の魂を分離する考え方がある。これは、多くの信仰に共通することであろう。その上、個体の死後その魂は他の個体に入っていく、という信仰に触れたブリテン島の人々にとっては、少くともエムペドクレス的輪廻転生の哲学の枠組は、かなり受け入れやすかったにちがいない。改宗後のアングロ・サクソン人にとっても、当然、人間の肉体と魂の問題は深い関心事であった。魂の行方を扱った文学作品も多い。当時の謎詩の中でも、

Rid. 43 や『エウセビウスの謎詩 (*Ænigmata Eusebii*)』の IV は、もっぱらこの問題を扱っている。『ロルシュの謎詩 (*Ænigmata Lavreshmensia*)』の冒頭の二作品は「人間」と「人間の魂」である。

エムベドクレスと *Rid. 74* の歴史の隔たりを思えば、*Rid. 74* には、「ダイモン」「神霊」「エムベドクレス」「四根」といった直接的なものではなく、もっと一般的に「魂」という解答を与えるべきである。

註

- (1) テキストは *Corpus Christianorum: Series Latina CXXXIII*, pp. 377—82. および J. H. Pitman, ed. *The Riddles of Aldhelm*, New Haven, 1925, Reprint. Hamden, 1970, pp. 2—5.
- (2) Numbering と *Rid. 74* の引用 (但し, punctuation は筆者) は G. P. Krapp and E. V. K. Dobbie, ed. *The Exeter Book*, New York, 1961. に従う。
- (3) E. Müller, *Die Rätsel des Exeterbuches*, Cöthen, 1861; F. Loewenthal, *Studien zum german. Rätsel*, Heidelberg, 1914; F. Holthausen, 'Anglo-saxonica Minora', *Anglia Beibl.* XXXVI, 1925, pp. 219—200; F. H. Whitman, 'OE Riddle 74,' *English Language Notes* VI, 1968, pp. 1—5; F. Dietrich, 'Die Räthsel des Exeterbuchs: Würdigung, Lösung und Herstellung', *Zeitschrift für deutsches Alterum* XI, 1959, pp. 448—90; J. A. Walz, 'Notes on the Anglo-Saxon Riddles', *Harvard Studies and Notes* V, 1896, pp. 261—68; F. Tupper, ed. *The Riddles of the Exeter Book*, Boston, 1910, Riprint. Darmstadt, 1968; G. P. Krapp and E.V.K. Dobbie, ed. *The Exeter Book*, New York, 1961; C. Williamson, ed. *The Old English Riddles of the Exeter Book*, The University of North Carolina Press, 1977; M. Trautmann, ed. *Die altenglischen Rätsel (die Rätsel des Exeterbuchs)*, Heidelberg, 1915; A. J. Wyatt ed. *Old English Riddles*, Boston, 1912; P. F. Baum, tr. *Anglo-Saxon Riddles of the Exeterbook*, Duke University Press, 1963; Erika von Erhardt-Siebold, 'The Anglo-Saxon Riddle 74 and Empedokles' Fragment 117', *Medium Ævum* XV, 1946, pp. 48—54. 'Notes on Anglo-Saxon Riddle 74,' *Medium Ævum* XXI, 1952, pp. 36—37.
- (4) 'Ioligo etiam volitat extra aquam' Cf Plinius, *Historia Naturalis*, IX.
- (5) ソクラテス以前の断片には H. Diels and W. Kranz, *Die Fragmente der*

Vorsokratiker, griechisch und deutsch, 3 vols, Berlin, 1952—1954. を用いる。

- (6) 井筒俊彦『神秘哲学』人文書院，第一部，1978，pp. 234—5.
- (7) 断片 (B 115). 訳文は，斎藤忍随『知者たちの言葉—ソクラテス以前』岩波新書，1977. による。拙論におけるエムペドクレス哲学の解釈については，とくにこの著書と，鈴木乾也『『カタルモイ』の完全憎』，『ギリシャ哲学の研究』1978. 89—117. に負うところが多い。後者は，エムペドクレスの宗教論『カタルモイ』と宇宙論『ペリ・ピュセオス』を対応させ，宗教論における完全憎の存在を探ろうとする意欲的な論文である。
- (8) 「灰色の髪の子」の解釈については，Erhardt-Siebold, *MÆ* XV, 1946, p. 48. および Tupper, p. 215. を参照。
- (9) 斎藤忍随訳。
- (10) 山本光雄訳編『初期ギリシャ哲学断片集』岩波書店，1954，p. 63.
- (11) ピタゴラスにはテラゲウスという息子がいて，エムペドクレスはテラゲウスに指導を受けた，と言われている。ヒッポボトスは，エムペドクレスが「テラゲウス，テアノとピタゴラスの高名なる息子よ」と言ったと言っている。(Cf. Diels-Kranz, 17A1)
- (12) 山本光雄訳。() は筆者施注。
- (13) 斎藤忍随訳。
- (14) Diels-Kranz, B 36. 井筒俊彦訳。
- (15) 近山金次訳『ガリア戦記』岩波文庫，第十五版，1972，p. 198. () は筆者施注。
- (16) Diodorus Siculus, *The Library of History of Diodorus of Sicily*, V, 28, 6.
- (17) R. Holmes, *Ancient Britain and the Invasion of Julius Caesar*, Oxford, 1936, p. 294.
- (18) Marcus Annaeus Lucanus, *De Bello Civili*, Book IV.
- (19) R. Holmes, pp. 294—5.
- (20) J. X. W. P. Corcoran, 'Celtic Mythology', *New Larousse Encyclopedia of Mythology*, (introduced by R. Graves), Hamlyn, 1973, pp. 236—40.